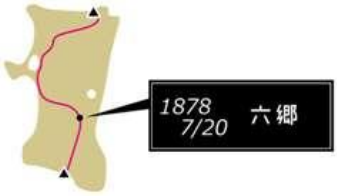
JRに運休や遅れ

イザベラ・バード秋田の旅（３）六郷編

2018年3月25日 掲載



「日本奥地紀行」では、不思議な葬儀の描写が登場する。男性は白や青の裃（かみしも）姿、故人の妻は空色の着物に白い羽織をまとい、まるで結婚式の花嫁のよう。青と白の着物があふれ、葬式というより祝祭が行われているようだった―。１８７８（明治１１）年７月２０日、六郷（現美郷町）でイザベラ・バードが目撃した光景だ。

六郷に着いて早々、富裕な商人の葬儀があることを知ったバードは警官を介して見学の許可を取り付けた。人目を引かぬよう着物と頭巾で日本人に変装。葬儀に葬列、そして土葬までの一部始終を見ている。仏式の葬儀は厳粛で作法が行き届いていたと記すが、現在のような黒い喪服の記述は全く出てこない。

◇――◇

「時代によって喪の色は変わってきた」と話すのは、学習院女子大の増田美子名誉教授（日本衣文化）だ。増田さんによると、日本の喪の色は白が基本で、江戸時代は武士や庶民は男性が白に水あさぎ色（薄い青色）の裃、女性は白無垢（むく）などを用いた。地方によっても異なり、「自分の持っている最も華やかな着物を着て死者を送るところもあった」という。バードが花嫁のようと記した故人の妻の装いは、死者に対する思いの表れだったのかもしれない。

だが明治に入ると葬儀は黒に染まっていく。「日本衣服史」によると、バードが六郷を訪れる約２カ月前の５月に行われた内務卿・大久保利通の葬儀では、会葬者は喪章として黒の襟飾りや手袋を着用。その後は黒を喪の色とする洋装の普及も相まって、政治家の国葬や皇族の大喪のたび、黒を着る習慣は定着していった。西洋化していない「本当の日本」を追い求めていたバードだけに、六郷の葬儀は一層心に刻まれたのだろう。

◇――◇

バードは旅の中で日光東照宮をはじめ、京都や奈良で多くの寺社を見てきた。だが六郷で見た寺もそれらに劣らぬほど印象が強かったらしく、こう記している。「この寺院は美しく、カトリックの教会とほとんど違わなかった」（金坂清則訳注「完訳日本奥地紀行」より）

この寺はどこなのか。地元の郷土史家・安倍莞爾さん（故人）らの調査によると、東高方町にある本覚寺（土田匡善住職）とされる。六郷史談会の高橋悦央会長は「富裕な商人たちの菩提寺（ぼだいじ）で、立派な杉の木があるという（日本奥地紀行の）記述とも合致していた」とする。

同寺に入ると、真っ先に目に入るのが鮮やかな山門だ。４年前に修復を行い、扁額（へんがく）の裏には寛永年間（１７８９～１８０１年）の建立を示す記述があったという。寺の本堂は５０年前の火事で焼けてしまったが、この山門は災禍をくぐり抜け、往時の寺の姿を今に伝えている。

© 2019 Akita Sakigake Shimpo